

コラム

## 富田先生の思い出 Memory of Prof. Tomita

### 宮田 満

株式会社宮田総研代表

株式会社ヘルスケア・イノベーション代表取締役

Mitsuru Miyata

CEO, Miyata Institute of Technologies, KK

CEO, Healthcare Innovation, KK

Correspondence to: <https://miyata-bio.net>

どうしても思い出せない。

富田先生といつ何処で最初に出会ったのか？なんだか、昔からの知り合いのような感じをいつも覚えていた。同じ匂いがする。同じ違和感を共有していた。

日経グループで40年間もバイオ関係の取材を行っていた。多分、日経バイオテクの取材でお目にかかったと推察しているが、その記憶はE-CELLという未完の研究のキーワードだけであった。学問の話をする富田先生の記憶は正直言うと曖昧模糊としている。

私の富田先生との最初の明確な記憶は、泥だらけの恰好で鶴岡の温泉宿に辿り着いたことから始まる。慶應義塾大学先端生命科学研究所の開設記念シンポジウムの打ち合わせが行われている宿だった。その日は朝から鳥海山でのキノコ狩りを行っていた。熊撃ち名人のマタギの親分に連れられ、8つの尾根を藪漕ぎしながら越えていた、6番目の尾根を越え、その高みから谷川を覗いた。すると大きな枯れ木が横たわっていた。よく見るとその枯れ木は、テラテラと光る薄茶色のナメコで覆われていた。今年のキノコ狩りは不調に終わるかと内心心配していた我々は、誰彼となく歓声を上げて、尾根を駆け下り、ナメコをリュック・サック一杯に詰め込んだ。後はマタギの親分が春に仕留めていた熊肉と取れたてのナメコを味噌汁に仕立てナメコ・熊汁を堪能するだけだった。

マタギの親分は一度家出して東京に出奔、飲食店に勤めており、そこで調理師免許を獲得していたため、熊肉の血抜き処理は完璧、かつて食べたことのない熊汁となった。こうした腹一杯、尚且つ、疲労困憊、そして泥だらけの姿で、鳥海山から1時間以上もタクシーに乗って、旅館に辿り着いた。明日のシンポジウムに高揚した慶應大学の研究者達や招待者達に交じり、何となく場違いな感じで飲みまくっていたことのみ覚えている。その時の富田先生の印象は、場の乱れた空気の中に、ただ一人、やはり溶け込めず、ちょっと浮いている感じだった。明日のシンポのために、緊張しているのかとその時は思ったが、20年以上付き合っていると、富田先生はどんな時にも場から少しだけはみ出していることに気づいた。

彼は孤独である。

しかしこの孤独こそ、予言者の資質なのだ。未来が見える者の痛みや苦しみとも言えるだろう。この孤独や違和感故に、富田先生は凡愚を先導して来るべき未来を説く、それも非常に情熱とリアリティをもって説く。当たり前だ。先生には未来が見えている。やがて凡愚はその夢を信じるようになり、共に前に一歩進む。一歩進んだことを見た、更に多くの凡愚たちが同じ夢を共有するようになる。渦が生じ、街や市、県、そして国を変える渦潮となった。当初は鶴岡市の富塚陽一元市長の「高等教育機関を鶴岡に」という夢が、今や富田先生の触媒作用によって、我が国初のバイオ・クラスターとして成長、結実しつつある。慶應義塾先端生命科学研究所に地元の高校生達を受け入れ、研究を体験させることによって、次々世代も育ちつつある。こうした子供たちが東京や仙台、そして海外で教育を受け、鶴岡に還流する大きな流れも形作られつつある。まさに富塚元市長との約束も果たしつつあると言えるだろう。この約束を守る律儀さも富田先生の特徴の一つと言えるかも知れない。どことなく育ちの良さを感じさせるエピソードだ。

実は、富田先生が鶴岡に来たのはある種の偶然であり、運命でもあった。広い青空の下ただただ一面に広がる田園風景に怖気づいた東京大学名誉教授が慶應先端生命科学研究所の所長を辞退した結果、転がり込んできた所長の地位を富田先生は慶應義塾大学の理事たちに一つだけ条件を付けて受諾した。「10年間勝手にやらせてくれ」という条件である。結局20年間以上勝

手を通して。見事な手綱さばきである。研究所にその精神の結晶がある。言うまでもなく巨大なジャグジーだ。この予算を通すために大学の理事達がどんな知恵をひねり出したか想像するだけで笑えるが、これこそ、今までにない Science & Resort を標榜して創設した研究所の真骨頂である。そして富田先生の違和感が新しい研究所を生んだエンジンである証拠でもある。

現在、鶴岡のメタポローム・クラスターには、8社以上のベンチャー企業が集結している。研究機関も集まりつつある。インキュベータの第3号棟の増設も完成したところだ。最初の上場企業であるヒューマン・メタポローム・テクノロジーからはスピナウト・ベンチャーが誕生している。富田先生や曽我朋義教授の技術に驚いた私が、東京のベンチャー・キャピタルに連絡したことが創業の切っ掛けとなった。スパイバーはタイに組換えクモ糸の製造工場を稼働させた。米国などへの進出も順調に展開しつつある。既に資金調達した金額から、東京証券取引所グロースでの上場よりは米国の振興市場である NASDAQ を視野にいれざるを得ないほど成長著しい。このベンチャー企業も、創業者が米国の大学で MBA を取得したいとふらついた時、「人の真似をするな」と叱咤した富田先生なくしては、米国 Dupont 社ですら失敗した組換えクモ糸の工業化という、創業当時は限りなく“法螺話”に近い未来を実現することはできなかった。

富田先生には是非、独創の道を独走する勇気と違和感を愛する心を、教え子や縁を繋いだ人々にこれからも伝えていただきたい。その律儀さ故に、多分、慶應義塾大学を卒業しても、また創造的な新天地を求めることは止まないはずだ。鶴岡のバイオ・クラスターの発展のために、大変申し訳ないのだが、いつまでも東京、鶴岡、いや地球上のどこでも、居心地の悪さを感じつつけていただきたい。それこそ予言者の宿命であり、居心地の良い環境に辿り着いたら最後、予知能力を失うことは、富田先生も当然ご存知のはずである。

いつまでも、いつまでも、どうぞお元気で。

違和感の友より。